

告示	番号	23	内分泌疾患
	疾病名	甲状腺機能亢進症（バセドウ病を除く。）	

甲状腺機能亢進症（バセドウ（Basedow）病を除く。）

こうじょうせんきのうこうしんしょう（ばせどうびょうをのぞく。）

概念・定義

甲状腺での甲状腺ホルモンの合成と分泌が亢進した状態が甲状腺機能亢進症である。自己免疫機序により甲状腺がびまん性に腫大し甲状腺機能亢進症を呈する疾患をバセドウ病と称する。それ以外の原因で甲状腺機能亢進症を呈するものがこの範疇に含まれる。

症状

● 臨床症状 Physical findings

甲状腺ホルモンの作用は全身の細胞での代謝の促進であり、結果として様々な症状が出現する。頻脈、収縮期血圧の上昇、甲状腺腫、多汗、易疲労感、落ち着きがない、手のふるえ、眼球突出、食欲亢進、頻脈、動悸、学業成績の低下、運動能力の低下、暑がり、排便回数の増加、微熱などが認められる。

● 検査 Laboratory findings

血中遊離サイロキシン thyroxine(T_4)、遊離トリヨードサイロニン triiodothyronine(T_3)、TSH の測定、TBII や TSAb などの甲状腺自己抗体の測定を行う。また、必要に応じ一般血液検査、甲状腺超音波検査、甲状腺ヨード摂取率やシンチグラム検査などを行う。

治療

新生児バセドウ病では、甲状腺機能低下状態では甲状腺剤を、機能亢進状態では抗甲状腺剤やヨード剤を、程度に応じ一時的に使用することがある。機能獲得型 TSH 受容体異常症では、ほとんどの場合生下時すでに甲状腺機能亢進状態にあり、新生児バセドウ病が否定された場合抗甲状腺剤やヨード剤の服用を開始する。放射線ヨード内用療法や外科治療も考えられるが、報告例が少なくまだ確立された治療法はない。

無痛性甲状腺炎は原則的に治療を必要としない。抗甲状腺薬は無効で副作用もあるので使用しない。甲状腺機能亢進状態で動悸などの症状が強い時は β 遮断薬を、回復期で甲状腺機能低下症状が強い時に甲状腺剤を使用することもある。

亜急性甲状腺炎では副腎皮質ホルモン剤が効果的である。服用をやめると再発することがあるので、2 か月程度かけて徐々に減量していく。

抜粋元：http://www.shouman.jp/details/5_10_16.html